

# ラスタファリアニズムのフロンティア

～ワガドゥグのラスタを事例に～

清水 貴 夫

## 0. 緒言

### 0-1. エピソード

2003年5月11日、この日はボブ・マーリー (Bob Marley)<sup>i</sup> の命日にあたり、朝からサウンドシステムが街頭に繰り出し、大音量でボブ・マーリーの楽曲が街中に響き渡っていた。特に”One Love”が流れ出すと街中の全ての人々が歌いだすような雰囲気につつまれる。夜になると、昼間に街頭で音楽を流していたサウンドシステムに代わって市中心街の主な広場はボブ・マーリー追悼集会の会場となり、幾つかの広場では有料になっており、中に入れない若者が広場を取り囲むように地べたに座り込んでいた。入り口付近では幾つかの露天も出店して、明け方まで騒ぎが続いていた。ラスタの象徴のひとつであるボブ・マーリーは死後22年たった現在においても絶大な人気を誇っているのである。

### 0-2. 本研究の意義

ディアスポラアフリカ人によって生起した、アフリカ人としてのアイデンティティの回復を求める運動には、パン・アフリカニズム、ネグリチュードの二潮流があり、パン・アフリカニズムの影響を受けた宗教社会運動のひとつがラスタファリアニズムである。当初ジャマイカのカルトのひとつに数えられたに過ぎないラスタファリアニズムは、1970年代のレゲエの世界的流行によって全世界を席卷し、それは同時代のアフリカでも例外ではなかった。

本研究では西アフリカの内陸国ブルキナファソの首都ワガドゥグで活動するラスタを描いていく。ブルキナファソの歴史地理的特色として、①旧フランス植民地であること、②内陸国であることの二点を挙げることができる。そしてさらに、

その伝播過程において、障害になったのは、メディアの発展の遅れ、ラスタファリアニズムやレゲエが英語圏系の文化運動であるということから、言語的な問題が考えられる。つまり、若者たちは、ラスタ文化をワガドゥグの若者たちが受容できる形に翻訳しなければならなかったこと、言語的な障壁やメディアの未発達がワガドゥグへのラスタ文化の浸透を難しくしていたことは創造に難くない。<sup>ii</sup>

ワガドゥグで活動を展開しているラスタはこうした環境の中から生まれ現在に至っている。加えて指摘しておかなければならないのは、ラスタ自体がサブ・カルチャーとして位置づけられてきたことと、<sup>iii</sup> 西欧文化を受容するばかりである文化的「周縁」の西アフリカの中でも、ワガドゥグはさらにその「周縁」の外側に位置する。つまり、ワガドゥグで展開するラスタ文化は地理的に、かつ従来の文化尺度的にも「周縁の周縁」<sup>iv</sup>と位置づけられる。しかし、そこにこそ人と人とのネットワークによって独自のラスタのスタイルが形成され、新たなラスタ文化のフロンティアが見られるのである。

ワガドゥグで展開されるラスタの文化表象は、レゲエというラスタの象徴的文化表象のみならず、パーカッションを中心とする彼らにとっての「アフリカ的」音楽や服装、民芸品などに見ることができる。これらの文化表象はラスタの生業と深く結びつき、いわば都市の若者の楽しみや生活の一部になっているといっても過言ではない。従来の抵抗運動としてのラスタファリアニズムという捉え方は、80年代に既に否定され、ラディカルな宗教運動という色合いはすでに薄れている。現代のアフリカ都市の若者文化を理解する上で、新たなラスタのスタイルを明らかにすることは、従来の研究を補完、刷新していくものと考えている。

本論は構成は以下の通りである。はじめにラスタファリアニズムの成立過程を概観する。次に、鈴木、石井、サヴィシンスキー (Savishinsky) らの先行研究からラスタファリアニズムがどのようにアフリカに伝播したかを検証、分析し、さらに、アフリカの若者文化の状況を鈴木の研究を元に述べていく。3では事例研究として、ブルキナファソ、ワガドゥグの事例を紹介してワガドゥグのラスタの生活を検証していく。最後に、ラスタファリアニズムが若者たちの生活に根ざし、若者たちの紐帯の装置として機能していることを論じ、ワガドゥグで展開されるラスタ文化の独自性を述べて「ラスタファリアニズムのフロンティア」とし

て位置づけていく。

最後に、本論文中で使用する用語について簡単に述べる。ラスタファリアニズムは、ラスタ思想のことを指し、ラスタはラスタファリアニズムを信奉する人、および、ラスタのファッションを実践する人のことを指して両者を区別する。

## 1. ラスタファリアニズムの成り立ちと習慣

ラスタファリアニズムは1930年のエチオピア皇帝ハイレ・セラシエ1世 (Haile Selassie I) の即位を契機として成立した「宗教社会運動」<sup>v</sup> と言われる。それ以前に、約400年に渡って主に西アフリカから奴隷としてディアスポラ世界に移送されたアフリカ人の経験を踏まえ、マーカス・ガーヴェイ (Marcus Garvey) の思想を元にジャマイカで生まれていた。そこでガーヴェイがまとめたのは、アフリカ回帰、反白人、反権力3つの思想的な原則で、奴隷貿易によって強制的に移送されたことに対するアンチテーゼと言える。ガーヴェイの原則を踏まえ、ラスタファリアニズムの萌芽は19世紀末期にすでに見ることができるが、これより少し前から起こったパン・アフリカニズムやネグリチュードと言った世界的な政治、文学運動が双方向的に影響を与え合ったことは当時の時代背景を如実に示すものである。

元来ラスタの生活はいくつかの規律によって律されている。例えばタバコ、アルコールを摂取することが禁じられているし、肉食主義が原則で、身体に刃物をあてることは神から与えられた身体を汚す行為として禁じられるといったことがあげられる。こうした禁忌の存在の一方で頭髪、ひげを切らずにドレッド・ロックスに、ジーンズなどのラフな服装をし、そしてガンジャ (Ganja)<sup>vi</sup> の吸飲をすることなどは現在のラスタの象徴的なスタイルともなっている。アフリカ回帰主義的な思想は、「アフリカの」とされた農村での生活への回帰ということと結びついて、レゲエの世界的流行以前のラスタの生活は、現代の都市文化中に組み込まれているものとはその様相をまったく異にしていたと言われている。

現在世界中で活動しているラスタは、「1980年代を境に…国民国家内部への適応と『アフリカ回帰』『白人打倒』といったラディカルな主張の衰退」<sup>vii</sup> したと言われ、次第にその様相をソフトな方向に変化させている。

## 2. アフリカ都市で展開されるラスタと若者文化－先行研究の検証

### 2-1. ラスタファリアニズムのアフリカへの伝播

上に述べたように、ラスタファリアニズムはアフリカ回帰運動、反白人、反権力といった思想に基づいた宗教社会運動として発展してきた。ディアスポラ世界で広まったラスタファリアニズムが、どのようにアフリカの諸都市に伝播していったかという問いは、アフリカの都市文化の系譜を考える上でも意義のあることだろう。

ラスタの伝播には主に三つの経路が考えられる。一つは人の移動、もう一つはテレビ、ラジオなどのメディアが考えられる。

ジャマイカに端を発し、主にイギリス、アメリカなど英語圏で発展したラスタファリアニズムは、最初にタンザニア、ガーナなど英語を公用語とする旧イギリス植民地で受け入れられていった。石井<sup>viii</sup>、サヴィシンスキー (Savishinsky)<sup>ix</sup>が「帰還ラスタ」の例とガーナの事例で報告しているように、アフリカ回帰を果たしたジャマイカ、イギリス出身者が入り込みやすかったことが主な要因と考えられる。

そして、アフリカの都市の若者を中心にラスタファリアニズムを受け入れることになった最大の動機として、レゲエの存在を見逃すことは出来ないだろう。サヴィシンスキー (Savishinsky) はこの点について、「地域を越えてラスタの文化を広めたのは、レゲエがこうした地域で受け入れられたから」<sup>x</sup> だとして、アフリカでのレゲエの存在の大きさを主張している。中でも、1970年代に世界的成功を収めたボブ・マーリーは、現在のアフリカにおいても神格化されるほどその存在感は大きかった。バレット (Barrett) はこうしたボブ・マーリーの影響を「第三世界のアイドルになったし、その音楽にこめたメッセージは、世界の多くの大陸で抑圧されている者を結集させるテーマとなった」<sup>xi</sup> として、ラスタ＝レゲエの世界的拡大を称えている。

最後に、メディアによる伝播を考えていきたい。鈴木はアビジャンのストリートボーイの研究で、西アフリカでも親仏政策をとったことで、早くからテレビ、ラジオなどのメディアの発展した同地域で欧米文化が早くから浸透したことを指

摘している。<sup>xii</sup> メディアは先の二つの要因をこの地域の人々が早くから取り入れるきっかけともなり、相乗効果を生み出すことになった。ハネルツ (Hannerz) が「どこの都市も、特に第三世界ではサブカルチャーや都市文化に接触したいと思って、農村部から都市に移住してくる人々を満足させる」とし、都市部の若者だけでなく、農村部の若者達が都市に移住してくる人にもレゲエ＝ラスタファリアニズムを受け入れる土壌があることを示している。

ラスタファリアニズムは以上の3つの経路からアフリカ都市に伝播していった。それではアフリカの都市の、特にラスタ文化の受容先であった若者の文化状況はどのようなものであったのか、次の項で検証していく。

## 2-2. アフリカ都市の若者文化論

次に、アフリカ都市で生まれた若者文化を、鈴木のアビジャンのストリートボーイの研究を元に概観してみたい。

農村部や他国から都市にたどりついた若者たちは、共通の言語を持たないことすらある。若者たちは、ストリートやゲットーと呼ばれる区域に集結し、独自の生活を展開する。アフリカの都市でしばしば見られる、いわゆるインフォーマルセクター、例えば、靴磨き、路上での新聞売り、民芸品売りなどで生計を立てている。彼らはコミュニケーションを容易にするために出身地別のコミュニティーを作ることが多いが、多様な地方出身者同士で各所に形成されているコミュニティー同士でのコミュニケーションを維持するための新たな手段を獲得する。その際に見られるのが、ストリート独自の言葉であり、アビジャンのストリートでは「ヌッシ」と呼ばれるフランス語と諸外国語、またコートジボアールの諸言語が混ざったスラングが完成する。

ストリート出身のアルファ・ブロンディ (Alpha Blondy) は1980年代に成功を収め現在にいたるまで国民的スターとして、非常に安定した人気を誇っている。アルファ・ブロンディ以前のコートジボアールはの文化状況は鈴木が指摘しているように、ジャマイカやフランスの音楽が中心であり、外国からの情報を「消費」していただけにすぎなかった。しかし、アルファ・ブロンディが「ヌッシ」による「アビジャン・レゲエ」を確立したことにより、60組を超えるレゲエアーティスト

ストが世に排出されていった。<sup>xiii</sup> 鈴木は、ブロンディの成功の理由を「ヌッシ」というストリート言語とレゲエの「下からの視線」におく。アルファ・ブロンディの試みは、90年代のラップ、レゲエブームを先駆けるものになったと言えるであろう。

### 2-3. 小括

以上先行研究を中心にアフリカで活動するラスタを概観した。

ここでは、サヴィンスキー(1994)、鈴木(2000)、石井(1998)の3名の研究を土台として論を進めた。これらの研究から明らかになるのは、ボブ・マーリーをひとつの媒体として、ラスタファリアニズムはディアスポラアフリカ人を中心に世界中に広がりを見せるものの、世界中のラスタが目指したアフリカではディアスポラアフリカ人の想定に反して独自の文化を創り上げていったということである。これは、伝播経路が脆弱なものであったためにより自らの想像力を鍛えなければならないこと、そして都市的状況、従来の枠組みに入れなかった、さまざまな出身地の若者にとって「周縁」からの視点<sup>xiv</sup>で人々に語りかけるレゲエが受け入れられ易かったといえるのではないだろうか。こうした意味で、アフリカ都市の文化を語る時、より包括的な枠組みでアフリカ人としてのアイデンティティメーカーとしての「レゲエ＝ラスタ」は、そのサブカルチャー性に反して、アフリカ都市文化の中心的テーマとして語られ直すことも再考するべきなのかもしれない。

次章では、こうしたアフリカ都市の一般の文化状況を踏まえ、ワガドゥグでのフィールドワークを元にしてワガドゥグの事例を紹介していく。

## 3. ワガドゥグのラスタ

### 3-1. ワガドゥグ概要

ブルキナファソの首都ワガドゥグ (Ouagadougou) 市は、人口は現在100万人ほどとされており、同国最大の都市である。他のアフリカ大陸の都市同様、独立前後から急激な都市化にさらされ、1960年の6万人から、1985年に50万人、1990年代中盤に60万人に達し<sup>xv</sup>、2000年以降、100万人超の大都市となり、現在では120万人とも130万人とも言われる都市になっている。

1996年に同市で開催されたフランスーアフリカサミット (France-Afrique Summit) を契機に20年ほど前から計画のあった、新高級住宅街、ワガドゥミル (Ouaga2000) が市南部に建設され、数年前から計画されていた市中心部の住宅地の再開発も始まった。そして市中心街東部のさらなる高級住宅街として予定されている地域は、プロジェ・ザッカ (Projet ZAKA) と呼ばれる都市計画の管理化におかれ、古くからあるコンパウンドが一掃された。ワガドゥグの様相はめまぐるしく変化を遂げている。

ワガドゥグで見られる急激な人口増加は、農村部からの人口流入が最大の原因となっているほか、近年のコートジボアール (2002年の大統領選挙に伴う)、トーゴ (2005年の大統領選挙に伴う) での政治的混乱によって、出稼ぎのために出国していたブルキナファソ人の帰国と当該国の一部住民が、西アフリカでは比較的的政治的安定が長く続いているブルキナファソに流入してきたことが考えられる。

### 3-2. ゲッターでの生活

ワガドゥグ市内には7箇所のゲッター<sup>xvi</sup>がある。うち3箇所は市中心街、ワガドゥグ国際空港近くに密集し、残りの4箇所は郊外にある。本稿では中心街にある3箇所のうちガーナ人街に隣接するNAYAC (Nouvelle Afrique-Yeux-Art-Culture) での観察を中心に論じていく。

市街地にあるゲッターにはプロパーのメンバーがそれぞれ10名前後いると思われる。プロパーのメンバーだけを数えれば、ワガドゥグのラスタの人数は70名前後ということになるが、他のラスタと緩やかに関係をもち、漸次ゲッターを訪れるラスタの数を入れると、その数は非常に多くなる。

NAYACプロパーのメンバーは約10名、リーダーはアダマ (Adama) という。アダマはNAYACのコンパウンドを二部屋借り、一室を自宅兼ゲッターとして他のラスタの集合場所として使い、もう一室を「Centre」として民芸品、楽器の製作場、倉庫などとして使用している。このコンパウンドの敷地内に中庭を囲むように10部屋あり、ゲッター以外の部屋にはそれぞれに家族所帯が住む。

ラスタはゲッターと呼ばれるコンパウンドの一室で、多くの時間を過ごす。ラスタの多くはゲッター以外に自宅を持ち、ゲッターに通う生活を送る。ゲッター

内での活動は、ゲッターのメンバーによる楽器、民芸品の製作が行われるほか、白人バックパッカーを連れ込み、ジェンベの奏法を教える光景も散見される。

そしてゲッターには、ラスタを自称するものの、ゲッター以外の場所を中心に行動しているラスタがしばしばゲッターを訪れる。3-3-2で詳しく述べるラミン(Lamine)はその中の一例であるが、ラスタの多くは民芸品に関わることで生計を立てている者が多く、ゲッターはそうした商売の情報交換であるとともに、ラスタ同士の語らいの場として位置づけている。こうした語らいの時にはガンジャや緑茶<sup>xvii</sup>が振る舞われ、しばらくコンパウンドの軒先で数時間にわたり語り合う。

このように、ゲッターはラスタが単に生活をする場としてでなく、情報集積の場であり、そのゲッターに関わる他のラスタにとって楽しみを享受する場でもある。

## 3-2. ラスタの経済活動

ラスタの経済活動は民芸品、音楽にまつわるものが多い。ラスタの多くはミュージシャンを自称し、平時には民芸品販売および製作を行っている。双方とも観光客に焦点を当てた商法といえるが、一方でこうしたラスタの生業の中に、ラスタの自己表象を含んでいることも見逃してはならない。

### 3-3-1 音楽

アダマは筆者との音楽に関する対話の中で「レゲエは商業音楽だ」とした。この言説は、ラスタが単に収入を得るためだけのものとして音楽を考えていないことを示しているだろう。そして、アダマはこのあと、「しかし、レゲエをやらないと客が入らない（収入が得られない）」と述べたことは、ラスタが彼らの信条のみに依拠することはできず、音楽活動によって生計を立てていきたいとするアダマたちの希望と、日常生活を送るための現実的なラスタの生活との間の葛藤が物語られている。

2003年にはアダマをリーダーとするNAYACは、ワガドゥグ市中心にあるZACCAで月に一回ほど演奏を行い、不定期に他のライブハウスでも演奏を行ってい



た。ZACCAは旅行誌などにも取り上げられるワガドゥグ最大の野外ライブハウスで、常設の「伝統的」民芸品展示とともに、演奏される音楽も「伝統的」であることをコンセプトとすることが多い。つまり、アフリカを目指してきた外国人、特に西欧から「アフリカ」を求めてきた旅行者をターゲットとした施設であるといえる。一方で市内に数多くある一般のライブハウスでは、ジュラ、モレ、バンバラ、マンディングなど、アフリカのローカル言語によるレゲエが演奏されている。その曲調は、レゲエ、ハイライフ、リンガラなど、アフリカに由来するダンスミュージックが多く、NAYACと同じく、職業として音楽を志す若者たちによって演奏活動が行われている。

### 3-3-2 民芸品

ラスタの生業を支えるもうひとつに、民芸品に関わる経済活動が観察できた。

ブルキナファソの名産品は藍染め、真鍮細工、カリバス（ひょうたん細工）と言われているが、一般的にワガドゥグの民芸品販売小屋ではマスク、ボゴラン（主にドゴンで作成される綿布）、藍染めの布、真鍮細工、カリバスなど、ブルキナファソの名産品以外にも、マリやガーナで作られている民芸品もブルキナファソの民芸品として売られている。市内の民芸品販売小屋密集地帯はインディペンデンスホテルの周辺、中央郵便局周辺、グランマルシェ近辺<sup>xviii</sup>である。それ以前はマルシェ2階部分に多くの民芸品販売者が店舗を構え、市最大の民芸品販売地域であった。である。民芸品作成は市内各所にあるが、真鍮細工の製作地域は市北部のシテ・アン・トロワ（Cite An III）に限られており、真鍮細工市場が市中心部にある。

ラスタの民芸品に関わる経済活動にはいくつかのパターンが見られる。3-3-1で挙げたアダマの出身地近郊のサピナ（Sapina）出身のアルファ（Alpha）とラミン（Lamine）のエピソードを紹介したい。

ラミン（29歳）はフランス人の経営するホテルイビの向かいに民芸品の販売小屋を持つ。ラミンの民芸品小屋の脇のスペースでサヌー（Sanue）というモスレムがボゴランを売り、後ろにはインターネットカフェ、ラミンの姉が経営する高級民芸品店があり、周囲はナイジェリア人が多く居住する地域になっている。こ

の小屋は年間20,000CFA<sup>\*\*\*</sup>を収め、営業許可を取っている。

ラミンの客層は主にホテルイビの宿泊客である。ホテルイビは中級ホテルの中では、自家発電設備やプールがあるなど設備が充実している。国連などの国際機関や先進国の援助組織、NGOなどの車がしばしば駐車場に止まっていることから、こうした援助機関のスタッフがしばしば宿泊しているようだ。ラミンは宿泊客が来るたびに気さくに声をかけ、友人関係を作ろうとする。しかし、多くの宿泊客はグランマルシェや郵便局前のラミンと同じく民芸品を扱うラストヤ若者たちの客引きに疲れ、ホテル前で待ち構えるラミンの話聞くことはない。もしくは、始めから民芸品売りを相手にしない態度を決めている者もいるため、ラミンの商売は決してうまくいっているわけではない。

一方でアルファ（33歳）はラミンのような店舗型の小売りは行わず、ボゴランを中心とする品物をマリから、また、アシャンティなどのマスクをガーナから輸入している。筆者はアルファと知己になったのは1999年のことであったが、当時コンパウンドのワンルームを借りていただけであったが、2003年には新築の2Kの大きなコンパウンドに移り住んでいたことから、アルファの商売が順調に運んでいる様子が伺えた。

アルファの自宅には常時数十枚の泥染め、ウコン染めのドゴン柄のボゴラン、数十枚のガーナ、マリのマスク、ジェンベなどの楽器、また、ボゴラン製の衣類などのストックがある。

アルファがマリやガーナに買い付けに行くのは、ストックが少なくなったり、大口の注文があったときや、外国人旅行者を案内してマリやガーナの観光地を案内するためなど、買い付けのみが目的でないことがある。アルファが筆者に語るところによれば、多くの買い付け旅行を通してブルキナファソから近いドゴンやシカッソ（Sikasso）、バマコ（Bamako）などを案内するということである。アルファ自身、将来多くの国を訪れてみたいという希望をもっており、旅行することが好きなことをしばしば語っている。そして、そうした旅行を通して、アフリカに来る旅行者にいくつもの地域を見て欲しいとも語ったことがある。

アルファ、ラミンともに、「民芸品を通じてアフリカを知ってほしい」「これ（民芸品）がアフリカだ」ということを時折口にする。近代化、西欧化が進行し、

多様な民族構成を見せるようになったワガドゥグは、若者達が自らが何者なのか、ということ自らに問いかけている。彼らの持つアイデンティティは、モシやグルマンシェ、ブルキナベだけでなく、アフリカ人という最も大きなくくりの中に自らを語ることがある。流動的な現在だからこそ、アフリカの中の自分たちという語り生まれたのかもしれない。

#### 4. 考察と今後の課題

ワガドゥグで筆者がともに過ごしたラスタたちとは、ラスタの禁止事項になっているタバコを吸い、豚肉を塊を頬張り、ビールを飲んでいた。そして、ラスタの象徴ともなっている、ドレッドロックスはラスタを自称する若者全てがそうしているわけではなく、むしろ多くは細かいドレッドロックスを切りそろえ、もしくは剃髪してしまっていたりと、ラスタファリアニズム元来の習慣を守る者が少なかった。鈴木によれば、ジャマイカにおいても、ドレッドロックスがファッション化してしまったために、この髪型にこだわらないラスタも多くなってきている、というように、必ずしもラスタファリアニズムの実践がラスタの条件となるものではないようだ。

こうした潮流はタンザニアでも見て取ることができる。石井はダルエスサラーム、モロゴロのラスタキャンプを調査して「ハイレ・セラシエの神格化の否定、「スワヒリ化」<sup>xx</sup>をタンザニアンラスタの独自の展開として指摘している。そして、もう一度鈴木の説を持ち出せば、アルファ・ブロンディがストリートのスラング「ヌッシ」やデウラ語などを用いてレゲエを歌ったことで成功を収めたことを考えると、もはやアフリカのラスタファリアニズムはそれ自体が一つの文化として一人歩きし始めたことが見て取れるだろう。

このようにして、コートジボアールやタンザニアのラスタは積極的に「アフリカのラスタ性」を外に向かってアピールしてきたが、ワガドゥグのラスタは、「アフリカ性」を生活に落とし込むようにしてきた点で、二つの事例とは異なった方向性を持つことがわかる。

そして一方で、ラスタの生活はインフォーマルセクターと呼ばれる生業形態と切り離せない関係にある。ナイロビのスラムを調査した松田は、「(ナイロビでは)

出稼ぎ民が職を得るチャンスは、ほとんど絶望的」で、「彼らのうちのあるものは都市生活を断念して村にもどり、あるものは、行商や路上職人、密造酒造りといった統計にのらない、いわゆるインフォーマルセクターに身をおく」<sup>xxi</sup>とする。また、ハート（Hart）がガーナの調査において、男性都市移民の動向を分析して、フォーマルセクターに就業できた者が定収入所得者であるのに対し、インフォーマルセクターへの就業者の多くが自営であると論じている。<sup>xxii</sup>さらに、そうしたインフォーマルセクターに就業した者の収入源は、暴力的手段によるもの、麻薬に関わる者、詐欺など、社会通念から逸脱した方法に依拠していることも併せて指摘している。

ラストの生活を考えたとき、松田、ハートの論述は説得力をもつものであるし、同様に鈴木の記事している「ヌッシ」の事例とも共通点を見いだすことが出来る。アフリカ都市で生活するラストが文化的創造性を持つ反面、こうした負の部分があることは当然認識されなければならないが、殊ワガドゥグのラストに見られるように、生業の中へラストファリアニズムの落とし込み、また、社会的紐帯としてのラストファリアニズムの存在は特筆すべきことではないだろうか。

本稿の最後に今後の研究の課題を付して本論を終わりたいと思う。

元来、ラスト文化は抵抗文化、サブ・カルチャーなどとして認識されてきた。しかし、80年代からラスト文化はそれまでのラディカルな色合いを薄め、若者たちの視点はファッションとして、またマリファナなどラストの外見、音楽、習慣に変化させている。この点に関して鈴木はアビジャンのストリート文化の観察から「アビジャンではラストファリアニズムの信仰と関係なく、こうしたラストの外見を模倣する若者を指して「ラスト」と呼ぶことが多い」<sup>xxiii</sup>としている。しかし、これまで見てきたワガドゥグのラストの事例のように、ラストをキーワードとして若者がコミュニティを形成していることを考えれば、ラストを自称する若者たちがラストでなくなることは彼らの生活を脅かすものであることが分かる。このことから、今後の研究の課題の一つとして、ラストの「自称性－他称性」の問題、またその裏付けとなるラストの生業の詳細、また生業、音楽にまつわるネットワークを明らかにしていきたいと考えている。

そして本稿では、ラスト文化の伝播と文化表象の二点からの指摘にとどまった。

しかし、ラスタの生業を探る上で、事例で紹介したアルファに見られるように、ラスタの行動範囲の国境を越えたダイナミックな諸相を見て取ることが出来る。こうしたことから、新たな視点として西アフリカの「沿岸-内陸」、「内陸-内陸」の経済的ネットワークを探ることに挑戦していきたい。

=参考文献=

バレット、レナード

1996 『ラスタファリアンズ レゲエを生んだ思想』 山田裕康訳 平凡社

伊那正人

1999 『サブカルチャーの社会学』 世界思想社

石井美保

1998 「越境するラスタファリ運動-タンザニア都市における社会宗教運動の展開」『民族学研究』 63/3

ヘブディジ, D

1986 『サブカルチャー スタイルの意味するもの』 未来社

松田素二

1996 『都市を飼い慣らす』 河出書房新社

鈴木裕之

2000 『ストリートの歌 現代アフリカの若者文化』 世界思想社

2001a 「新しいモードの出現-アビジャン・レゲエの示す超民族性-」『現代アフリカの民族関係』 和田正平編著 明石書店

2001b 「ストリートは文化の揺り籠」『アフリカの都市的世界』 嶋田義仁、松田素二、和崎春日編 世界思想社

Hannerz, Ulf

1992 *Cultural Complexity, Studies in the Social Organization of Meaning*

COLUMBIA UNIVERSITY PRESS New York

Keith Hart

1996 *Informal Income Opportunities and Urban Employment in Ghana "Perspectives on Africa"* Blackwell publishers

Mcfarland, Rupley

1998 *Historical Dictionary of Burkina Faso* The Scarecrow Press Inc.

Savishinsky, Neil J.

1994 *Rastafari in the Promised Land: The spread of a Jamaican Socioreligious*

Movement among the Youth of West Africa, "*African Studies Review*" 37(3) pp19-50

- i 本名Robert Nesta Merley
- ii コートジボアールを中心とする西アフリカのメディアの分析は鈴木 (2001:313-314) に詳しい。
- iii ヘブディジ 1986:51-70
- iv 伊那 1999 p125
- v Savishinsky 1994、石井1998
- vi マリファナ (学名 *Canabis Sativa*) のこと。ラスタの間ではハーブともいい、薬草と捉えられている。
- vii 石井1998:260
- viii 石井 1998:270-274
- ix Savishinsky 1994:33
- x Savishinsky 1994:33
- xi バレット1996:331
- xii 鈴木2001:313-314
- xiii 鈴木1996, 2001a:312-316、「ヌウシ」はストリートで醸成された若者たちのスラングのことで、アルファ・ブロンディは公用語であるフランス語ではなく、「ヌウシ」の歌詞を歌い上げることで、「下からの視線」を歌い上げた。
- xiv 鈴木 1996, 2001a, 2001b
- xv Macfarland 1998:97
- xvi 元々はディアスポラユダヤ人の集住地域を指したが、現在では抑圧者の集住地域一般を指す。本論中では主にラスタコミュニティのリーダー宅がラスタの結節点となっており、そこを指してゲッターと称する。
- xvi 西アフリカでは、日常的に各所のコンパウンドで濃く入れた緑茶に大量の砂糖を入れてティーパーティーが行われる。
- xvii グランマルシェは2003年に全焼した。それ以前はマルシェ 2 階部分に多くの民芸品販売者が店舗を構え、市最大の民芸品販売地域であった。
- xix 1 ユーロ=約656CFA (セーファフラン)
- xx 石井1998:268
- xxi 松田1996
- xxii Hart 1996
- xxiii 鈴木2001a:319

(しみずたかお 比較人文学)